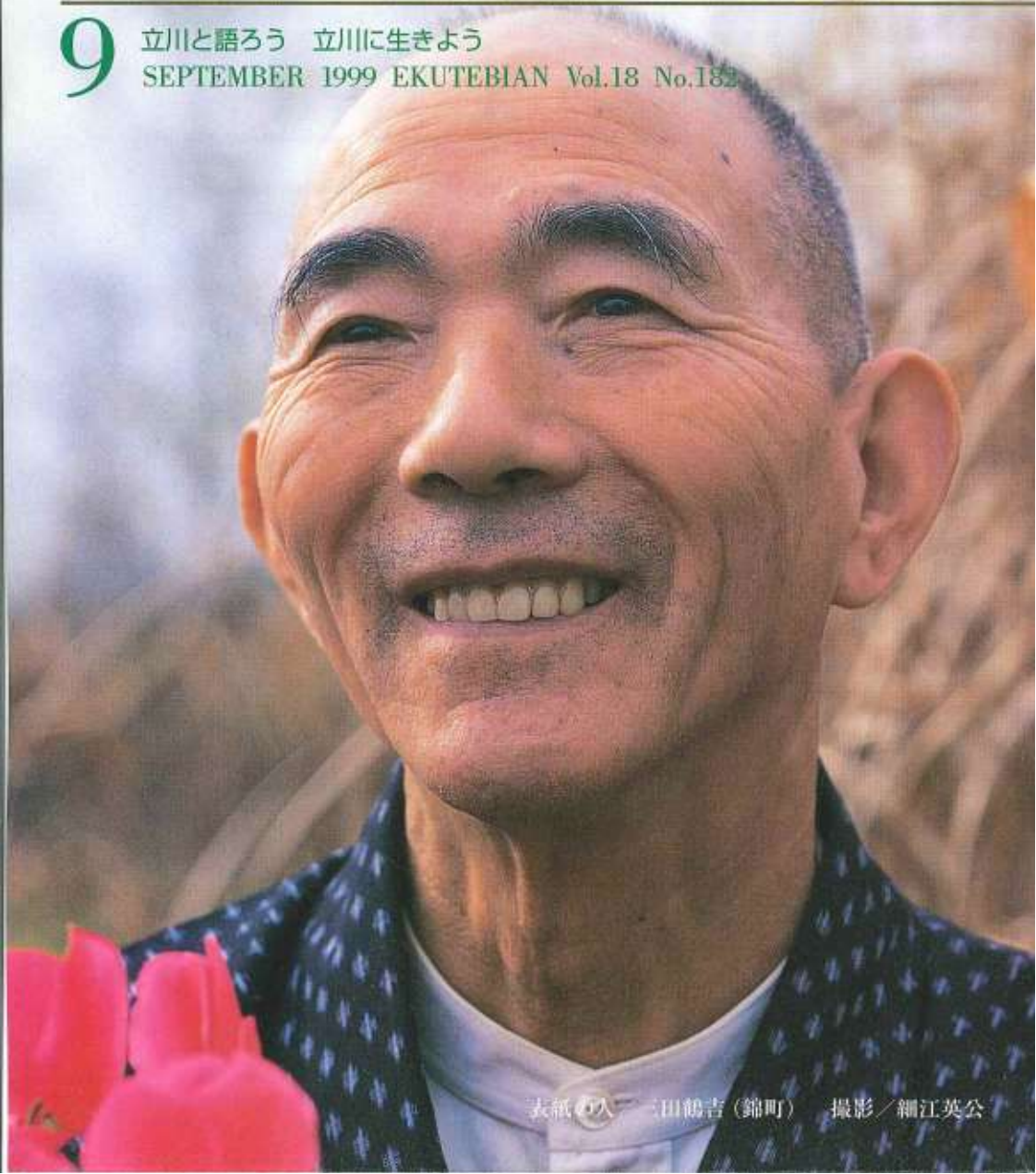
えくてびあん

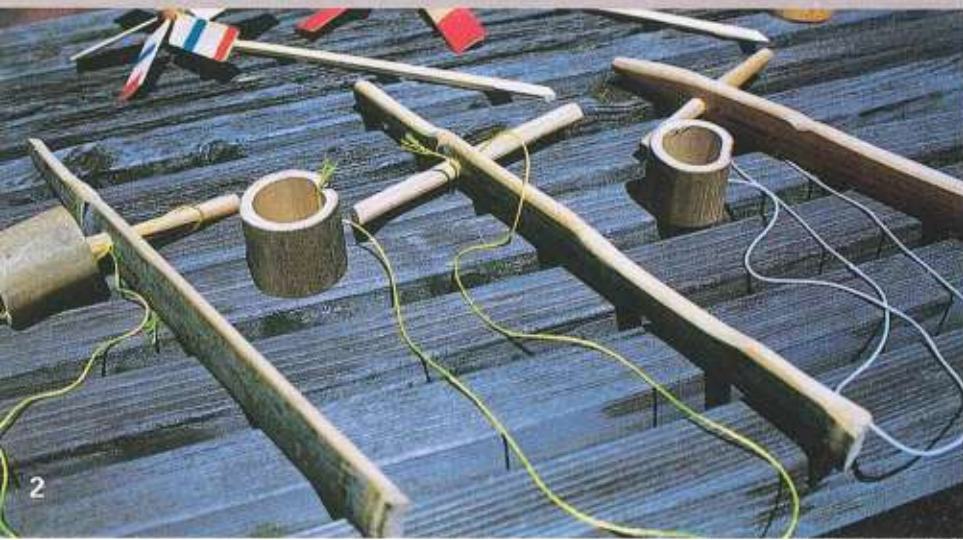
9
立川と語ろう　立川に生きよう
SEPTEMBER 1999 EKUTEBIAN Vol.18 No.182

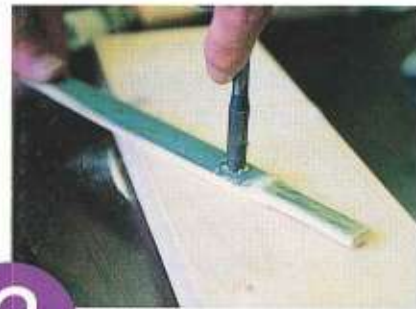
表紙の人　三田鶴吉（錦町）　撮影／細江英公

くらふと画報⑧ 協力：立川市クラフト同好会

青竹のけんだま

少年諸君、自由工作に悩んだらコレだ

残り少ない夏休み。今頃は宿題に追われている少年少女も多々いるに違いない。今回は、自由工作のテーマにうってつけのクラフトを紹介しよう。材料は竹と凧糸のみ。近所に竹やぶがあるなら、持ち主に許可をとって１本もらってこよう。切ったばかりの青竹はまだ乾燥していないので、２～３日放っておいてから作り始めるのがベストだが、多少加工しづらい程度で作業には何の支障もない。切ってすぐに、その場で作り始めるのも醍醐味のひとつ。「組立てには釘も接着剤も一切使用しないので、手軽で安全です」（西川さん）。

今月の先生
西川正夫さん（一番町）

1 竹を鉈（ナタ）でタテに割り、本体の作成。幅３～４センチが目安だが、好みで太くしても良い。

2 割った竹の先端を削り「剣」を作る。小刀で削った後は、ヤスリをかけて形を整える。

3 本体に垂直に交わる「剣」を差し込むための穴をあける。必ず竹の外面からあけること。

4 本体の穴に通す「剣」。余った竹を削って作る。穴の直径にぴったり合うように、形を整える。

5 竹を輪切りにして「玉」を作る。断面をヤスリで整えたら、キリで穴をあけ、凧糸を通しておく。

6 「玉」につないだ凧糸の一方を本体の穴に通して、あとから「剣」を差し込めば完成。

技術を超えて「天命」へ

日本空手道『佐藤塾』宗師 佐藤勝昭さん

啓介 佐藤塾には今、塾生さんは何人ぐらいおられるんですか。
佐藤 およそ三〇〇人ぐらいですね。
啓介 そんなにいらっしゃるんだ。やはり若い方が多いんですか。
佐藤 競技の選手として空手をやるには、やはり十代、二十代のうちじゃないと難しいんですが、うちは健康づくりのための空手も教えてますから、小さな子供から七十、八十代のお年寄りまで、幅広いですね。
啓介 八十代ですか、すごいなあ。佐藤さんご自身は、いつ頃から始められたんですか。
佐藤 もともと私は柔道だったんです。父も兄もやっていたものですから、小さい頃から自然に胴着を着せられてね。柔道家の子供は、黙っててもやるものなんでしょうね、真っ白い胴着と黒帯が憧れでした。
啓介 柔道と空手というのは、似ているようで全然違うでしょう。どうして空手の世界に入られたんですか。
佐藤 高校卒業して就職をして、夜学に通いながら柔道を続けていたんです。それが二〇歳ぐらいの頃に、怪我をしてしまった。肩と膝を痛めてしまったんです。その頃の柔道は、もう「力の柔道」と云われる方向に向かっていたものですから、医者に止められまして。まあ、それで断念したんですね。
啓介 そこで空手と出会ったわけですか。
佐藤 そうですね。大山倍達の「極真空手」に入門したんです。
啓介 怪我をされて柔道はできなくなっても、やはり武道家としての道は捨てられなかったんでしょう。その極真時代に佐藤さんは、なんと世界チャンピオンに輝いている。やはり素質、才能なんでしょうねえ。
佐藤 いえいえ、素質はないんです。たまたま身体が大きかっただけなんですよ（笑）。当時、空手の選手で身体が大きい人は少なかったんですね。柔道には私ぐらいの人間はたくさんいましたが、空手では大きい方だったんです。
啓介 ご自身で指導されるようになったのはいつ頃からなんですか。
佐藤 その世界大会というのが今から二十四年前だったんですが、それが終わって、兄のやってる防災会社に勤めたんです。それまでほんとに「空手馬鹿」のような生活で、親兄弟にも迷惑をかけてたもんですから。その後、二年ぐらいたって「空手を教えてほしい」という人が出てきたんですね。そこで少しづつ教えるようになったんです。それが今につながっているんですね。
啓介 そうだったんですか。先ほど、塾生が三〇〇人と聞いてびっくりしたんですが、それだけの数がいると、当然いろんなタイプの方がいるでしょう。それぞれに闘争心というか、エネルギーを持たせるように指導されるのは、なかなか難しいと思うんですが。
佐藤 大きくわけて、二通りぐらいで考えるんです。ひとつはその人間の育ってきた環境というものがありますね。もともとの性格というか、資質を見るということがあります。もうひとつは稽古の中で、少しづつ負けじ魂を養っていくということがありますね。先輩や同輩と交わったり、ライバルが生まれたりする中で生まれてくるものがありますよね。
啓介 小さな子供たちも多いようですね。
佐藤 子供たちに接していると、感じることがたくさんあります。今騒がれている学級崩壊の問題も、よくわかる気がしますね。子供の眼力は凄いんですよ。
啓介 ガンリキですか？
佐藤 はい。子供は大人と接する時、瞬時にその人の本質を見抜いてしまうそうです。馬鹿にしても平気だ、ということになってしまうんでしょうね。ここは心魂を練る道場、精神を鍛える道場ですから、その点は厳しく指導しなくてはいけないんですね。

■佐藤勝昭（さとうかつあき）：柔道選手として活躍していた佐藤さんが「極真空手」の門を叩いたのは20才の時。恵まれた体躯で頭角を表し、昭和50年に開催された第1回国際大会に出場。強豪を次々と倒し最初の世界チャンピオンに輝いた。後に極真を離れ独立。日本空手道「佐藤塾」を開き、平成9年柴崎町に立川道場を開講。まさに「大海芥を択ばず」といった人柄の佐藤さんを慕って、現在、老若男女300名もの塾生が鍛錬に励んでいる。今年53歳。
■立井啓介（たていけいすけ）：本誌編集人。

啓介 お話を伺っていると、空手の技術面を教えるばかりではなく、内面的な部分での指導を重要にされているようですね、ただ闇雲に技を磨くだけではなく。
佐藤 眼に見えないものの大きさというのはあるんですね。
啓介 そういう意味で云えば、きっと塾生の皆さんにとっては、佐藤さんは空手の先生であり、また人生の師でもあるんじゃないでしょうか。
佐藤 いや、自分はまだまだ足りないんですね。今も毎朝四時から、諏訪神社の境内で鍛錬してるんですよ。
啓介 へえ、毎朝四時ですか！
佐藤 もう八年続けています。中国で盛んに行われているんですが、立って行う禅（「立禅」）で「気」を養っているんですね。
啓介 いわゆる「気功」の「気」ですか。
佐藤 はい、そうです。四十二～三歳の頃でしたか、体力的に危機感を感じ始めて、ウェイトトレーニングやランニングを毎日欠かさず行っていたんですね。しかし、やってもやっても衰えは進んでいく。どうしたらいいんだろうと途方に暮れていたところで、気功と出会ったんですね。「これだ！」と思いました。
啓介 気というものは、具体的にはどう考えたらいいんでしょうか。
佐藤 そうですね、よく例えられるのは「勢いよく回っているコマ」の状態だと云われていますね。速く回れば回るほどコマの姿勢は安定していくという、その回転するエネルギーが、気そのものではないかと。
啓介 静かに安定していながら、実は大きなエネルギーを帯びている状態ですね。
佐藤 はい。禅を通じて、呼吸法を学び、気を養う。要するに「内功（ないこう）」を鍛えるということなんです。眼に見える部分は陽、見えない部分は陰。「陽は陰より生じて、陽を統めるものは陰である」という言葉もあるんですよ。
啓介 心がしっかりしていれば、身体は自在になるということでしょうか。
佐藤 おっしゃる通りです。この呼吸法を覚えると、ご年輩の方でも本当にいつまでも元気でいられるんですよ。私のところに通っている七十、八十の方も、皆さんカクシャクとされています。
啓介 年輩の方といえば、佐藤さん、富士見町に鈴木藤太郎さんという方がいるんです。
佐藤 はい、はい。先月のえくてびあんの表紙に出られている方ですよね。驚きました、百二歳。とてもいいお顔をされていて。
啓介 今でも毎日畑に出られているんです。佐藤さんのお話を伺っていたら、もしかしたら藤太郎さんは、畑に出るということで、知らず知らずのうちに気のエネルギーを体得しているんじゃないかと思ったんですよ。
佐藤 そうですね、自ずと呼吸法が出来ているのかも知れませんね。それにリヤカーを引いて神田まで人助けに向かったというお話、感動しました。あの生き生きとしたお顔を見ていたら、きっとこの方は「生かされている」という感謝で一杯なんだろうなあと思います。毎日畑に出て、良いものを作って、ひとに喜んでもらう。きっとそれをご自身の「天命」だというように感じられているんじゃないでしょうか。
啓介 そうですね。「喜んで生きる」というのは、ひとつの鍵なんじゃないかなと思います。
佐藤 ああいう風になりたいですね。
啓介 佐藤さんの場合は、きっとその呼吸法を多くの人に伝えることが…。
佐藤 はい。天命でしょうね。
啓介 ところで佐藤さん、僕みたいなヤセッポチでチビでも、その呼吸法は教えていただくことができるんでしょうか。
佐藤 もちろんですよ（笑）。さっそくやってみましょうか、どうぞどうぞ…。

モノノケ、あらわる。

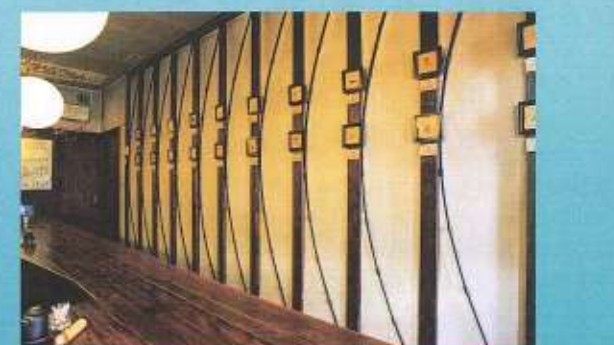
『日本物怪観光』代表・天野行雄さんが描く妖怪たち

「モノノケ」の魅力に憑かれてしまった青年が栄町3丁目にいる。天野行雄さん、29歳。幼い頃から、人と自然の間にいるとされる物怪（妖怪）の存在に興味を抱き、東京造形大学で本格的に美術を学んだ後も表現のモチーフはすべて物怪。その思い入れは芸術活動団体『有幻怪社・日本物怪観光』を主宰するまでに。

自然の脅威と人間の想像力、両者の不思議な融合である物怪。全ての物事をプラスとマイナスで片づける世紀末の浮世に、果たして彼らは何を思うだろう。

●「1995年4月に前身団体である『日本物怪研究所』が設立。翌96年1月に、異界へのトラベルを可能にした世界初の旅行怪社として再出発。社名を『日本物怪観光』と改める。怪社の詳細は不明。総資産や社員数についても明らかではない。96年8月には関連電気怪社『物怪電気（モノノケエレクトロニクス）』、出版怪社『物怪印刷（モノノケプレス）』がスタート。同年10月にはインターネット通信怪社『物怪通信（モノノケネット）』がスタートしている…」（有幻怪社日本物怪観光・怪社案内パンフレットより）

●栄町5丁目「手打ち蕎麦・信吏」(537-0991）にて『第壱回天野行雄お化け繪展』開催中（9/10まで）

三田鶴吉さん（錦町）

リヤカーをひいて花を売っておられたところから、今日の生花業として大を成した鶴吉さん。全国規模でのご活躍によって、勲五等双光旭日賞を受賞されたのが3年前。立川観光協会々長、文化財保護審議会委員長などの要職を勤め、特に民俗学に造詣が深いことでも知られる。また「川は多摩川、花は三田」と云われるほどに多摩川を愛し、クリーン多摩川実行委員長としての存在も大きい。口にこそされないが「世のため人のため」を身に備えた、全身これボランティアの人、鶴吉さん。

（於・多摩川河川敷／撮影・細江英公）

東風

小誌で『くらふと画報』を連載して8回目になる。この画報を見て自分でも取り組んでみようとしている読者が多いと聞いて、編集者冥利◆クラフトをはじめて「こころの病」が治ったという人がいると知って驚いているところである。そんなことがあるのであろうか。手先を使うことは健康に良いとは聞いていたが現代の社会病理である難病が、こう云ってはなんだが、たかがクラフトで治るものであろうか。はじめ、耳を疑ったものである◆少し大きな病院へゆくと大抵「心療内科」なる部門があって、そこには患者が列をなしている。自分でもその列に加わったことがあるのでよく解るのだが、待ち時間の長さで病気が倍増するのではないかという程に根気が要る。こういう部門が出来たのはつい最近のことではなかろうか。明治大正時代にはなかったであろうし、昭和も後半に入ってからか、あるいは平成の声を聞いてから普及してきたらしい◆なんだか、医療が進むにつれて病気が増えている気配さえある。重症患者を幾人か知っているが、抑うつ症、心身症、強迫神経症等々、余人からは「なまけ者」としか映らない。「たかがクラフト」がお役に立つとは本統なのであろうか◆えくてびあん　火中の栗を　拾はんか

【第二次えくてびあん同人】
編　集　新井紀美子 / 大久保清志 / 小林康史 / 空谷 空 / 山田五郎
デザイン　池田義男 / AMNET DF
写　真　中村　伸 / 五来孝平

えくてびあん 9月号
第18巻　通巻182号
平成11年9月1日発行

発　行　えくてびあん編集工房
〒190-0012
東京都立川市曙町2-17-5 杉田ビル3 F
TEL. 042-528-0082 FAX. 042-528-0065
編集人　立井啓介
発行人　名尾居真
印　刷　(株)大廣社

第1回えくてびあん杯争奪 立川べーごま選手権

伊藤良三選手
趣味の呉服『丸屋』専務

第1回戦B組

片桐由行選手
『さゆり商店』代表取締役社長

伊藤選手調子出ず、片桐選手まず一勝

第1回戦の二組目は、曙町の呉服店『丸屋』の伊藤良三選手と、同じく曙町『さゆり商店』の片桐由行選手の対決。プライベートでは仲が良いお二人が、敵味方に分かれての真剣勝負。この日の為に練習を重ね、意気揚々と臨む伊藤選手に対し、淡々とした面持ちで練習時間を過ごす片桐選手。下馬評では伊藤選手勝利の声が高かったが、試合は予想外の展開。主催者側が用意したコマに馴染めず、なかなかトコに乗らない伊藤選手に対し、片桐選手は一投一投確実にトコに入れ点差を離す。その後も伊藤選手の調子は戻らず、14対0の大差で片桐選手の勝利となった。「まぐれだよ」と笑う片桐選手。伊藤選手はさすがに悔しそうに会場を後にした。

真味百撰 ㉙

割烹 ひら山

栄町4-21-8 / 526-1716
12:00～13:30、18:00～24:30 / 土日祭定休

季節ごとの創作料理と手作りの器でもてなしてくれるとっておきの居心地のよい店

「静かにゆっくりと楽しんでほしい」。入口の扉を開けると正面に、こう毛筆で書かれた看板が何気なく置いてある。一見あたり前のようなこの条件を叶えてくれる店は、実は案外少ない。

店内で目に留まる味のある陶器の数々は店主平山陽一さんの父上の作品。低く静かにジャズが流れ、落ち着いた空間が確保されている。とは言え決して堅苦しくないのは、なにはともかく「楽しんでほしい」という店主の心意気のため。素材などにこだわりぬくという姿勢を敢えて捨て、「反グルメ」とも言うべき立場に立つ。「こだわればこだわるほど、いい素材は確かにある。でも、おいしいものをリーズナブルな値段で提供したい。もっと気楽に楽しんでほしいんです」。この言葉は、けだし平山さんの料理の腕の自信に裏打ちされたものである。三年間某割烹店で習得した日本料理を基本に、ひらめきによる平山流アレンジを加え独自の一品を作り出す。当意即妙に調理するため、次回同じ一品を味わうことは難しいが、事前に予約をすればリクエストも可。

また一人2,000円～の予算でコースの予約にも応じてくれる。年齢層や好みに合わせてアレンジしてくれるのが嬉しい。

「ちょっとおまかせコース」(2,500円)から。左上から時計回りにほたての利休饅頭、鮎のゆかり焔、銀むつの西京漬け、前菜盛り合わせ。

ゴロさんの独断毒語 ②

積秋説

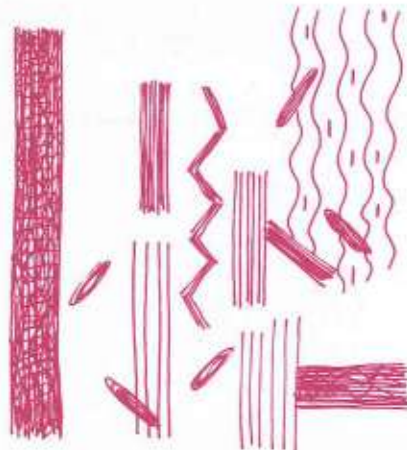
もしかして『積秋説』という言葉をお聞きになったことがあるでしょうか。ないでしょうね。多分、ないでしょう。字引にも、百科事典をひいても載っておりません。と云うのも、実はこれは私めの「造語」だからです。随分前からこの説を唱えているのですが、どの字引も相手にしてくれません。困った日本国です。

今年の「立秋」は八月八日でした。この暑さの中で秋が立つといわれても納得がいかない。ご年輩の方はご記憶から去らないと思いますがあの敗戦日、八月十五日、猛暑の中で冷房機はもちろんのこと、扇風機さえないところで玉音放送を聴かれたでしょう。あの日が「秋」だと云われても、どうもピンときません。

ですが、立秋が過ぎているのですから、やはりあの日は「秋」だったんですね。そこで、秋というものはどのようにしてこの日本にやってくるのか、その点に考えを及ぼせて『積秋説』なる珍奇な説を立てたわけです。

立秋のその日から、秋は積もってゆくのです。天から秋が降ってきて、地上一センチくらいの時には誰も気がつかない。暑い暑いと天を罵るばかりです。ですが、例えば甲子園の高校野球の決勝戦が終わって、球場はおろか満天にサイレンが鳴りわたります。見上げれば大会旗が飄然と揺れております。あの風こそが「秋風」第一陣にちがいない。大空の色合いもどことなく秋めいているではありませんか。

イラスト 綾 幸子

その後も秋は燦々と天から降り続け、人の背の丈くらい積もると、——秋もだいぶ深まってまいりましたねえという挨拶を交わすようになり、隣は何をする人ぞ、の心境に達するのであります。それならば、冬も春も夏も同様であろうと思われるでしょうが、どうも、秋以外は「積もる」という実感が薄い。

その秋に、人間はどんなにか諸々の想いを託してきたことでしょうか。「秋晴れ」と云っただけで、春や夏のやや澱んだ空気ではなく、一里も先が見通せるような透明感が湧いてきます。その昔この国では、秋梭魚は嫁に食わすな、と云われていたそうです、それほどの美味だったのでしょう。

秋になると世は美味に満ちてまいります。少年時代、貧乏ではありましたが運動会ともなれば茣蓙の上に「秋の実り」がいっぱい並んだもので、おじいちゃん、おばあちゃん、母さん、父さん、兄貴や弟たち、仲のいい友だちと「秋」の交換をしたものです。

大人の秋はなぜか愁いを帯びております。秋の鹿は笛に寄るという程に、恋ごゝろもまた秋の風に乗りやすいもののようです。

残暑厳しいなどと云っているうちに、秋はひそかに降り積もり、もうじき人の背丈を越えようとしているところです。今年、愁いおおき秋を愉しめるでしょうか。

（やまだごらう・詩人）

連載 四字熟語(25)

知崇礼卑

ちすうれいひ、と読む。

人間は、知識をますます崇高に、その礼はいよいよ低くするほうが良いという意味。

崇は「高い」「あがめる」意。「知崇」は、知識は高く明らかにして、尊ぶべきものだということ。

「礼卑」は、みずからをへりくだって、人を尊ぶべきものだということ。似た表現として「実るほど頭を垂れる稲穂かな」が用いられる。

赤川作品十二撰 2

「ここからアンダンテ」

東京都武蔵野市

クラシカルな自転車を押し、ハットを小粋にかざして中央線・武蔵境駅北口駐輪場前に立つこの老紳士は、朝に夕にここを通る人々に「いってらっしゃい！」「一日ご苦労さま」そう声をかけるような気持ちでつくりました。駐輪場付近は混みあって危険、ここからは自転車を降りましょう、駐輪場はマナーを守って使いましょうというサインとしての役割も担う彫刻ですが、忙しい日々を暮らす私たち、この紳士にならって、ときには走るのを止めて、ここからはちょっと「アンダンテ」、そう、「歩く速さで」行ってみませんか。

（1992年制作・赤川政由）